

ご挨拶

## KYB技報発刊50号にあたって

小澤 忠彦\*



今年、KYBは創立80周年を迎えました。その年にKYB技報発刊から50号の刊行となったことは、実に感慨深い思いです。

現在のKYB技報の前にも技報的雑誌は存在していましたが、長くは存続しなかったようです。おそらく、組織的活動の形を取っていなかったためであろうと思います。

1990年のことでした。当時の技術担当役員から私に、「技術報告雑誌を作ってくれないか」という依頼がきました。私の前任者にもその相談をされていたのを知っていましたが、進める様子はありませんでした。私は初代編集委員長として任期を2年と決め、「カヤバ技報」発刊の職務を引き受けました。編集委員を全技術部門に配置し、記事の集約を行い、1990年10月第1号を発刊しました。任期の2年が経過し、第2代の編集委員長を決め、その運営を引き継ぎました。発刊以来、一度も欠号することなく、年2回の発行が定期的に行われたことは、その後の組織運営が上手く進み、今日を迎えたものと思います。なお、編集委員長は今現在で、通算10代目となっており、第41号からA4版サイズの採用など大幅なリニューアルを行い、現在に至っています。

もう25年も前のことですが、一つだけ秘密にしていたことを話しましょう。何事にも他人のすることを揶揄したり、無言の妨害をしたりする人はいるものです。私が初代編集委員長になったのを聞いて、「どうせ技報なんて長続きしない」と言っている人がいると聞き、その人に向かって、「どんな理由にせよ、技報に掲載する記事が集まらなくなったときはカヤバ工業の終わる時だ」と言ったのを記憶しています。その考えは、25年の時を経て、今日でも何ら変わりません。

今、手元に第1号の目次があります。その当時、研究テーマとして挙がっているものが、今の売り上げのピークを迎えようとしています。これは、如何



写真1 KYB技報第1号の表紙と目次

にして将来のニーズを捉え、基礎研究テーマを定めるという判断が、その企業の将来を左右することを表した良い例と言えるでしょう。

さて、読者の皆様はKYB技報が国立国会図書館に継続的に保管されていることをご存知でしょうか？これは、こちらから保管を望んだ訳ではなく、先方からの要請によるものです。

ある学会の集まりの後、そこに参加していた大学教授から、「次の技報はいつ発行されるのか？」と問い合わせを受けたことがありました。また、あるお客様からは、「もっと早いタイミングで発行してほしい」というコメントを頂いたこともありました。その時、「ああ期待されているんだ」と誇らしく、また大変嬉しく思ったことを覚えています。また、「これだけ期待されて始めたからには、長く続けなければならない」と強く思ったものです。現在のKYB技報は読者の皆様にはどのように映っているでしょうか？今後も忌憚のないご意見を頂戴できればと考えております。

あと5年後の2020年には、我が国は東京オリンピックを迎え、KYBは更に創立100周年に向かって進んでいくこととなります。今後、我々は更に技術的な進歩を遂げ、グローバルに記事が執筆されることを願うべく、技術者諸君には大いなる期待を持ちながら、筆を置くことにします。

\*当社取締役・前代表取締役会長